

vol.4

国譲り神話

文 島田 雅彦

text by Masahiko Shimada

日本人は歴史上、外圧に屈した経験が少なくとも五回ある。最初は「白村江の戦い」での敗戦によって、唐から滅ぼされる危機に直面したが、事実上の属国になることで窮地をしのいだ。二番目は元寇で、二度にわたる蒙古軍の襲来を辛くも台風によって退けることができたものの、支配体制瓦解の原因となった。三番目は南蛮人の渡来とキリスト教の伝来である。鉄砲伝来により、内戦状態が起こり、新たな天下人の登場を促した。四番目は明治維新で、黒船来航により、帝国主義の影響をもろに受け、極端な西洋化が進んだ。五番目はアジア、太平洋戦争の敗戦で、アメリカによる占領とその後の間接統治に甘んじる結果となった。

一連の外圧は日本の統治システムを根本から変えるきっかけになったが、逆に外圧がなければ、何も変わらず、停滞し、腐敗する。そこそが日本の元型である。そもそも、『古事記』に国譲りの神話として記されているのは、

大陸から九州に渡ってきた渡来人が先住民から国を譲られたという話である。畿内全域を統一した渡来人たちは、出雲の先住民と敵対関係になったが、彼らから国を譲られたという体裁で、出雲国を大和朝廷に併合したのだ。そして、国譲りの後、出雲国の人々は追い立てられ、九州や東北に安住の地を求めた。彼らはそれぞれ隼人、蝦夷と呼ばれ、大和朝廷の征伐の対象となった。日本列島を二分する渡来人と先住民の熾烈な生存競争は源平合戦の時代まで続いたといっている。東西文化の差異も、東北と関西の反りが合わないのも、ここに由来する。

国譲りの神話はその後も外圧が強まるたびに想起され、現代でもアメリカによる間接統治、従属的同盟という形で反復されている。先祖代々受け継がれた一種の強迫観念を振り払うことなどできるのか？ 統治システムの根幹に関わる意識を変えるのは難しいが、自らの手で国譲りの神話を書き換える思想を編み出し、市民に共有され、旧来政治への抵抗運動に発展すれば、変わり得る。

Profile

1961年東京生まれ。1984年東京外国語大学ロシア語学科卒。在学中の1983年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。主な作品に『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）、『悪貨』、『虚人の星』（毎日出版文化賞）、『君が異端だった頃』（読売文学賞）ほか多数。『忠臣蔵』、『Jr. バタフライ』のオペラ台本もある。芥川賞選考委員。法政大学国際文化学部教授